

臘扇堂

石川県白山市北安田に明達寺というお寺があります。外見は少し広い普通のお寺。観光名所でもなく、ひっそりとした佇まい。その一角に法隆寺の夢殿を模した臘扇堂があります。建立されたのは昭和29年。関心のない方には何の価値も感じられないお堂でしょう。しかしながら、暁烏敏（あけがらす はや）

に関心がある人にとっては聖地のような場所です。筆者にとっても大切な場所、何年かにいちど尋ねては、自分自身を振り返る場所になっています。

臘扇堂には、明治時代の宗教哲学者清沢満之（「歎異抄」の再発掘者）と、暁烏の像が安置されています。暁烏が斜め下から師である清沢を仰ぎ見る配置になっています。正面を見据える清沢、その視線を遮らないところから師を仰ぎ見る暁烏。

清沢は、ミニマム・ポッシブルを標榜し、最低限の禁欲自戒の生活を行いながら「宗教骸骨」などを著しました。学究肌の哲学者です。暁烏は説教師として各地を歩いた方です。上手な説教とカリスマ性で多くの人びとを惹きつけたそうです。家内の祖母も彼のファンだったようです。情熱的で女性にももて、発展的女性関係のために批判を受けるこ

中嶋哲夫の「人事も歩けば」



▲師の清沢満之を仰ぎ見る暁烏敏

とも多かったとのこと。清沢満之とは正反対の人物像が浮かびます。二人は宗門改革を企て、破門になったり復権したりしています。

浄土真宗は人物崇拝をしない宗教です。親鸞は「弟子を持たず」という主張をしています。また、法然を師としながらも「師を持たず」とも主張します。阿弥陀仏がお救いくださるのだから、阿弥陀仏にすがることだけが正しい信仰であると専修念仏を唱えたわけですから。そこには師や弟子はなく同朋のみが存在する。そう考えるのが浄土真宗。暁烏も「師を持たず」と明確に述べています。

にもかかわらず、暁烏は、晩年に臘扇堂を自分の寺に建立します。本堂ではなく本堂の裏手の片隅に小さなお堂を建てる暁烏。20歳に出会った師を生涯の師として慕い、77歳まで変わらぬ気持ちを持ち続けた暁烏の姿が、私の心に緊張感、伸びやかな緊張感を与えてくれます。

暁烏は臘扇堂が落慶した後、1週間後に亡くなりました。明達寺を清沢の子孫に託したうえでのことです。

(MBO実践支援センター代表)